

新しい年を迎えました。皆さんは、この日をどんな思いで迎えられたでしょうか？私個人は、普段はあまり暦を気にしないのですが、やはり元日というのは、どこか特別な感じがします。特に今年は、元日が聖日ですから、このように主への礼拝をもって新年を始めることができる恵みを主に感謝しています。

ところで皆さんは、昨年最初の礼拝で開かれた聖書の箇所を覚えておられますか？**第一テサ 5章 16-18節**のみことばです。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです」。いかがでしょうか？今日あなたは主イエスにあって喜んでいますか？あなたの祈りは主のゆえに絶え間のないものとなっていますか？すべての境遇の中で、主にあって感謝しておられますか？

昨年もしろんなことが、世界において、また身近なところでありました。喜ばしいものもあれば、悲しみや痛みが伴ったものもあったことでしょう。でも、それがいかなるものであれ、私たちが信頼し、救いの望みをおいている主イエスは、日々必要な助けと力、またご自分の平安を与えることで、私たちの心を天の御国へと向かわせて下さいます。新しく迎えた2017年もこの主なる神様を求めていきたいと思えます。主のみこころは何か、何が主に喜ばれることかをどこまでも追い求めていきたい、そう願わされています。

数週間ほど前から週報にも祈りの課題として載せていましたが、今年礼拝で開くみことばをこれまで祈り求めてきました。なかなか決まらなかったのですが、最終的に「使徒の働き」で平安をいただきました。この「使徒の働き」は、英語部が二年ほどかけて見てきたもので、先月終わりを迎えました。日本語では、1年半ほどかけて見ていく予定ですが、どうぞこのことのために祈り下さい。みことばを取り次ぐ私のためもそうですが、何よりもご自分のため、神様があなたにみことばを語り、御心を悟らせて下さるよう、待ち望む心をもって毎週礼拝に備えていただければ幸いです。

少し前置きが長くなりましたが、ここから今日のところに入っていきます。もう一度、**6節**を見ます。「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです」。昨年の礼拝において、私たちはこのピリピ書を開きましたが、このパウロのことばが、新年を迎えるにあたり、私の心に示されています。

ここでパウロは「良い働き」ということばを使っていますが、それは別の言い方では「救い」ということができるでしょう。つまり、私たちのうちに救いの良い働きを始めた方がおられるというのです。そして、それは私たち自身ではありません。私たちではなく、父なる神様が、御子と御子の御霊を通して、私たちのうちに救いの良い働きを始めて下さいました。しかも、それはただ主の一方的なあわれみによるものです。このことを正しく理解するところから、神様のすばらしさ、その恵みの大きさに、私たちの心の目は開かれていきます。

パウロという人は、それを最も良く理解していた人と言えるでしょう。というのも、主イエスを救い主と信じる前の彼は、ユダヤ教の律法主義者、神に対して非常に熱心な人でした。ところが、その人間的な熱心さは、神の救い主にさえ敵対させる生き方へと彼を向かわせました。つまり、彼は信仰者たちを激しく迫害したのです。それがどんな理由からであれ、神に敵対する者、罪を犯す者には、神のさばきが下されて当然です。

でも神様は、そんな彼をさばく代わりに、異邦人たちに福音を宣べ伝える選びの器として、彼を使徒、また宣教者として召し出されました。それがいかにあり得ないこと、神様のあわれみによるもので、恵み以外の何ものでもないことを自分の体験として味わい知ること、パウロは自分を含む、すべての罪人のうちに救いの良い働きを始められたのが神様であると語っているのです。

皆さん、あなたもそのことを知っていましたか？今日あなたが、主イエスを通して神様を知り、その救いを自分に与えられたものとして喜ぶことができるのは、神様があなたを選び、恵みと愛をもってご自分のもとに召し出して下さったからです。あなたがまず神様を愛したからではありません。すべての信仰者は、この神様の招きに感謝をもって応答した人たちで、そのようにして救いの良い働きは、神様によって始められたのです。

パウロは言います。「私たちのうちに良い働きを始められた神様は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださる」と。私たちのうちで救いの良い働きを始めて下さった神様は、「自分でそれを完成なさい」とはおっしゃいません。「あとは、自分で何とかして天国に入るにふさわしい聖なる者となりなさい」とはおっしゃらないのです。なぜですか？ 私たちにはそれは不可能なことだからです。でも、神様ご自身がそれを完成させて下さるので、私たちにはご自身に対する信仰を最後まで問うておられるのです。

ところが、私たちはそのことを忘れてしまう。自分で完成させないといけないかのように考えてしまうことがあるのです。ガラテヤの教会の人々がそうでした。ガラ 3:1-3「ああ愚かなガラテヤ人。十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前に、あんなにはっきり示されたのに、だれがあなたがたを迷わせたのですか。2 ただこれだけをあなたがたから聞いておきたい。あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行ったからですか。それとも信仰をもって聞いたからですか。3 あなたがたはどこまで道理がわからないのですか。御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか」。

私たちが御霊を受けたのは、律法を行ったからではなく、主イエスが十字架にかかり、その死をもって私たち罪人を贖って下さったという福音の良き知らせを信仰をもって聞いたからです。私たちではなく、主が、神様の義の要求を、ご自身のいのちをもって満足させて下さったので、私たちは彼によって罪の赦しを得ました。さらには、復活された主によって永遠のいのちにあずかる者として、彼の御霊を救いの保証としていただいたのです。ですから、私たちが御霊を受けたのは信仰をもって聞いたからですが、それは神様がその良い働きを始めて下さったからで、その完成もまた、私たち自身の行いによるのではなく、神様によります。

では、いつそれは完成されるのでしょうか。「キリスト・イエスの日が来るまで」、つまり、主が再び戻って来られる日に、神様は、私たちの救いを完成されます。それが実際にいつであるかは、私たちは知る必要はありません。ただ私たちとしては、この救いについて、また、それを完成して下さる神様について、何もせずにじっとしていたら確信をもつことができるかということ、そうではないのです。自分のもてるすべてをもって、それらについて知ろうとすることが問われます。求めなしに知ることはできませんし、知らないなら、本当の意味で、神様が主イエスを通して与えてくださる救いを信じることはできません。

では、どうしたら良いのでしょうか？ 神様にしても、救いにしても、それはみな神の御子イエス・キリストを通して知り、また与えられるものですから、主との関係が問われます。今日、あなたと主との関係はいかがですか？ それはこの世のどんなに親しい人よりも、近い関係ですか？ あなたにとって主イエスとの関係は、配偶者よりも、家族よりも、親友よりも、どの人間関係よりも、最も親密で、生きたものでしょうか？

どうぞ知って下さい。主イエスは、あなたとのそのような深く信頼に基づいた関係を求めておられます。あなたはそこまで親密になることを願っていないかも知れません。つかず、離れずの程よい距離を保ちたいと思っているかも知れません。でも主イエスは、あなたと親密な関係を求めておられるのです。あなたが望むなら、もっといって、主に対して心を開き、主をお迎えするなら、主はあなたに近づいて下さいます。

そのために、祈りとみことばが私たちと主とを結ぶツールとして与えられているのです。日々祈ること、みことばに聞くことはお務めではありません。むしろ、それを通して、私たちが主をより深く知ることで、救いについて、また神様に対して確信が得られるためです。主は、祈りとみことばをもってご自分に近づく者に、聖霊を通して、ご自身を現して下さい。ですから、それを用いないなら、やがて主が来られた日に、神様とその救いのすばらしさを知らないまま、または確信のないままで主の前に出ることになってしまいます。そのようなことがないように、主は今日もみことばと祈りを通してご自身を現して下さい。

パウロは、その最後の部分で、「完成させてくださることを私は堅く信じている」と言っていますが、それはピリピの人々の信仰が本物であるという彼の確信に基づいた言葉であると私は思います。というのも、ピリピの人々は、ただ心において個人的に主を信じていたのではなく、エペフロデトを遣わしたり、献金や物質などを送ることを通して、彼らの信仰は外側の奉仕へと向けられました。しかも、パウロが、信仰のゆえに牢に入れられるという逆境のただ中においてです。

順境の日に、パウロをサポートすることはそう難しくはなかったかも知れません。でも逆境の日には、そこに危険や犠牲が及ぶ可能性が高くなるゆえに、容易ではなかったと思うのです。それこそ、彼らの信仰が根底から問われたことでしょう。でも、パウロは、そこにピリピの人々の主への信仰を見ました。主イエスが彼らを捕らえて下さっている、彼らのうちに救いの良い働きを始められたのは神様であって、神様がそれを完成させて下さる、という確信にパウロは導かれたのです。

いかがでしょうか？ 今日、主があなたの日々の歩みをご覧になられて、主はあなたのうちにご自分に対する信仰を認めて下さるでしょうか？ あなたの主への信仰は、言葉であれ、行動であれ、以前、主を知るまでのあなたのそれとは違いを生み出していますか？ すべての奉仕を含む、私たちのこの世での歩みは、他の人に見せるためのものではありません。それゆえに、誰にも気づかれないことも多々あることでしょう。でも、主はご存知です。主はすべてを見ておられます。そのうえで、あなたのうちにご自分に対する信仰を問われるのです。

このことばも、昨年テモテ書を開く中で、私自身が教えられ、いつも心に残っているものですが、パウロが自分の死の近いことを悟り、最後に愛する弟子のテモテに記したテモテ第二のみことばを開きたいと思います。
II テモ 4:6-8 「私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来ました。7 私は勇敢に戦い、走るべき道のを走り終え、信仰を守り通しました。8 今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現れを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです」。

神様がこの世の歩みにおいて私たち信仰者に求めておられること、それはこの世での信仰の戦いを勇敢に戦うことです。すべての権威をもっておられる神の救い主、勝利者イエスが共におられるゆえに、私たちは日々の信仰の戦いをいつも勇敢に戦わなくてはなりません。そして、神様がそれぞれに備えられた走るべき道のを主イエスから目を離さず、最後まで走り終えることです。パウロが「信仰を守り通しました」というのはそのためです。私たちのうちで救いの良い働きを始められたのは神様であり、御子イエスです。そして、それを完成されるのも、このお方です。主が再び来られた日に、主によってその信仰（信頼）を認められ、義の栄冠を授けられる人はなんと幸いな人でしょうか。